



## ARTRAMBLE

学芸員の視点	26
平成24年度の新収蔵品について——江上ゆか	
学芸員の視点	46
コレクションの展示について考える	
—奇跡のクラーク・コレクション展——小野尚子	
ショート・エッセイ	6
いのちの色 美術に息づく植物——鈴木慈子	
トピックス	7
「奇跡のクラーク・コレクション」展関連事業	
美術の中のかたち 関連事業	
「2013県展」が開催されました	
美術館の周縁	8
夏休みだから特別なことを! ——遊免寛子	

## コレクションから

丸髷を結った女性がふと月を見上げる一瞬。季節は晩夏もしくは初秋でしようか、着物の裾と袂を揺らす松林を吹き抜ける風、縞の着物を袴に着こなしたすらりとした女性の佇まいが涼やかな情趣を醸し出しています。

東京、深川に生まれた伊東深水是、13歳の時錦木清方に入門し、風俗画家として画業をスタートさせました。歌川国芳、月岡芳年、水野年方そして清方へとつづく江戸の浮世絵の流れを受け継ぎ、人物画家、美人画家として活躍する一方、大正半ばごろに興った、画家・彫師・摺師の共同制作による新しい木版画制作を目指す新版画の運動にも参加、木版画にも優れた作品を多く残しました。深水の人物画の特徴である明快な線描は、木版画

制作の経験が多少なりとも影響していると思われます。

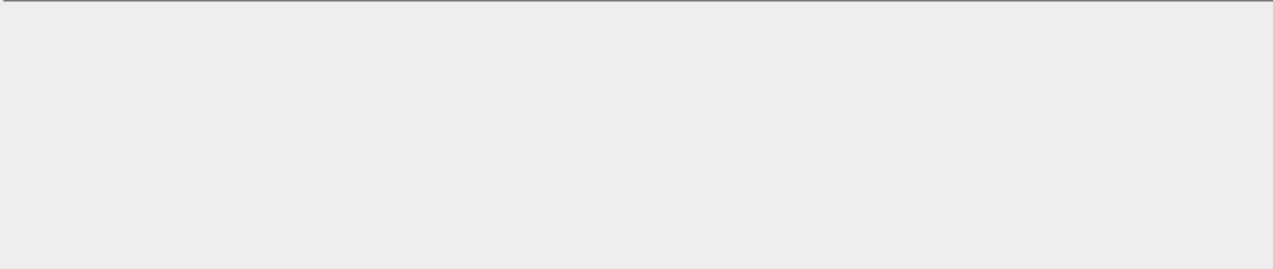
本作品は、深水が池上本門寺（東京都大田区）の山裾に画室を新築した1930年前後に描かれたとみられます。池上時代ともよばれる、1940年ごろにかけての時代、深水はそれまでの情調的な女性像から一歩抜け出てモダンで粋な独自の美人画を模索していました。何気ない仕草や所作の中に女性の美しさを見出そうとする深水の眼差しが感じられる作品です。

（飯尾由貴子／当館学芸員）

伊東深水（1898～1972）  
〈松聲〉  
制作年不詳（1931/昭和6年頃?）  
絹本着色・軸装  
122.5×27.0cm  
平成24年度寄贈（故 坂井和子氏旧蔵）

# 平成24年度の新収蔵品について

江上ゆか



昨年度、当館では640点の作品を新たに収蔵した。平成23年度に引き続き購入はなく、いずれも寄贈によるものである。

S.W.ヘイターの作品191点をまとめて受贈した23年度の総点数249点の、さらに倍以上の数となったのは、「信濃橋画廊コレクション」583点を一括受贈したことが大きい。

（左から）木村光佑（RELATION（リレイション））1972年

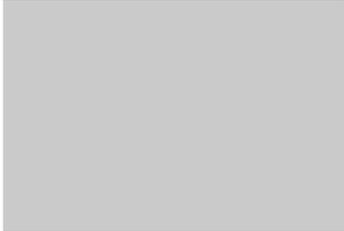
信濃橋画廊は、1965（昭和40）年に大阪市西区本町、信濃橋交差点近くのビル内に開廊し、2010（平成22）年12月まで同所で活動を続けてきた。週単位でスペースを貸すいわゆる貸し画廊だが、画廊による企画展も開催、関西では京都のギャラリー16（1962年開廊）とならぶ最古参の現代美術系画廊として知られてきた。

2010（平成22）年の秋に閉廊が明らかとなってほどなく、この画廊の顧問的立場であった彫刻家の福岡道雄氏を通じ、画廊主の山口勝子氏が手元に保管されてきたコレクションを当館に寄贈したいとの申し出をいただいた。山口氏が兵庫県下淡路のご出身ということもあり、当館にお声がけくださったとのことである。

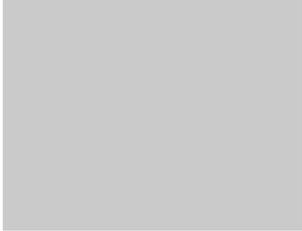
600点近くもの作品は、信濃橋画廊での発表時に山口氏が購入し、あるいは作家から贈られる等、さまざまな経緯で集まってきたようだ。45年にわたる画廊の活動にともない、自然と形成されてきたコレクションと言えるだろう。長らく画廊事務所の倉庫にしまわれていたため、その存在を知る人は、関西の美術関係者でも少なかった。2011（平成23）年1月に当館へ搬入後、整理と確認の作業に2年近くを費やすこととなり、2013（平成25）年3月に受贈手続きを完了した。

個々の作品についてはまだまだ調べるべきことも多いのだが、これまでに把握できた範囲で、コレクションの概要や特徴をまとめておきたい。

対象作家は165名。信濃橋画廊で発表歴のある作家を中心に（そうではない作家も幾人か含まれる）、関西の作家が大半である。制作年代を見ると、例は少ないものの1960年代から、画廊最後の年である2010年までがカバーされている。最後の10年間ともなると、元永定正（1922－2011）、小清水



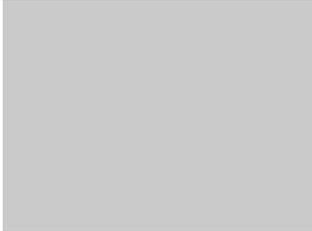
木村光佑（RELATION（リレイション））1972年



松井紫朗（Window Flare R8）2001年



石原友明（Untitled）1986年



徳野卯一郎（すみのえのなみのかよひじ）1996年

漸（1944－）といったベテラン勢から、松井紫朗（1960－）、松井智恵（1960－）ら80年代に登場した作家たち、さらには高橋耕平（1977－）、岸雪絵（1981－）のように70～80年代生まれの作家まで、作り手の世代も幅広い。山口氏が、古くから見続けてきた作家の作品だけではなく、おそらくはその時代ごとの若手を応援する意味で、作品を購入していた様子が見られる。

ジャンルとしては版画の割合が多い。タブローや彫刻も含まれるが、大半は小品で、いわゆるミュージアム・ピースと呼びうるような大作は少ない。ただし、小品ではありつつも各作家の特質がよくあらわれた作品が選ばれており、山口勝子氏の「眼」の確かさが感じられる。

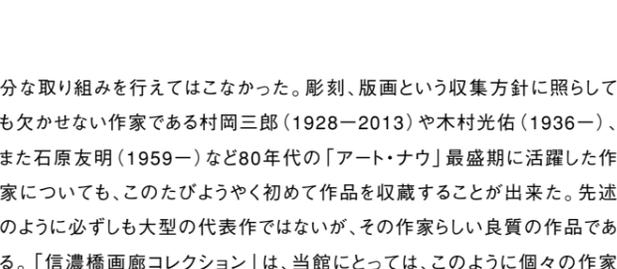
徳野卯一郎（1937－）や佐久間嘉明（1947－）のように、必ずしも時代の最先端ではないかもしれないが、ぶれることなく自らの表現を追い続ける作家たちの作品が数多く含まれるのも目につく。時代とともに歩んできた画廊のコレクションということで、45年間の関西の動向が自ずと見え隠れはするのだが、俯瞰した時代の印象には容易に収斂されがたい多様な表現こそが興味を惹く。信濃橋画廊というひとつの現場をとっても、あるいは信濃橋画廊という現場だからこそ、同時代に様々な表現が併存していた、その幅の広さや層の厚みを、本コレクションからは知ることができる。

なお「信濃橋画廊コレクション」を画廊の歴史や時代の動向と関連づけて考える際には、インスタレーションやパフォーマンスなど、そもそも「もの」として残らず、コレクションには入りづらい作品の存在に注意を払う必要がある。作品を売ることは二の次の貸し画廊だからこそ、実験的なスタイルの発表にも向いていたという考え方もできるだろう。こうした発表形態の作品について知るうえで欠かせない画廊のダイレクトメールや記録写真などの資料類も、あわせて当館で受け入れ、整理を進めているところである。

当館では、前身である兵庫県立近代美術館（1970年開館）の時代から、シリーズ展「アート・ナウ」を開催するなど、関西の現代美術の紹介につとめてきた。しかし作品収集となると、1986（昭和61）年度の「山村コレクション」の一括収蔵以後、財政面での諸事情もあり、現代美術の分野で必ずしも十



元永定正（あおといろいろ）1995年



分な取り組みを行えてはこなかった。彫刻、版画という収集方針に照らしても欠かせない作家である村岡三郎（1928－2013）や木村光佑（1936－）、また石原友明（1959－）など80年代の「アート・ナウ」最盛期に活躍した作家についても、このたびようやく初めて作品を収蔵することが出来た。先述のように必ずしも大型の代表作ではないが、その作家らしい良質の作品である。「信濃橋画廊コレクション」は、当館にとっては、このように個々の作家レベルでも既存の収蔵内容をおおいに補完するものである。さらに583点の総体は、広く関西の戦後美術史研究にとり重要な基礎資料のひとつであり、地域全体の貴重な文化財と言えるだろう。

（左から）横尾忠則（日本原景旅行 霧島Ⅱ）1973年

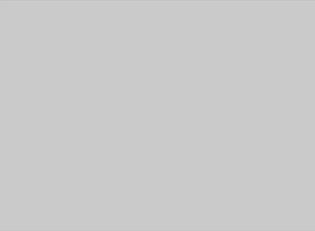
「信濃橋画廊コレクション」に加え、昨年度はもう一件、まとまった数の寄贈を受けている。横尾忠則による〈日本原景旅行〉38点である。このシリーズは、1973（昭和48）年から74（昭和49）年にかけて月刊誌『芸術生活』に掲載された連載記事のイラスト原画で、当館では既に13点を平成13年度に購入している。このたび作者の手元に残されていた作品を一括して受贈することで、シリーズの大部分が揃うこととなった。

また昨年度、現代美術の分野では、さらに5作家につき新たな収蔵品があった。

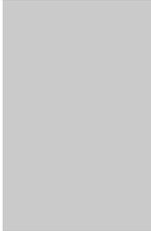
戦後関西で大きな存在感を示した前衛美術グループ、具体美術協会の一員でもあった元永定正については、既に61点の作品がありつつも欠けていた80年代後半から2000年代にかけてのタブロー4点が加わり、作家の歩みをほぼ通観できるほどに収蔵品が充実した。

同じく具体のメンバーであった菅野聖子（1933－1988）についても、具体時代の作品は既に収蔵していたが、このたび最晩年、すなわち具体以降の作例を加えることが出来た。

久保晃の3点は、いずれも1956（昭和31）年結成の制作者集団「極」時代の、人物モチーフによる半具象の作品。久保については、色面抽象に転じた70年代の版画作品が「信濃橋画廊コレクション」に含まれており、偶然にも相互に補完するかたちでの収蔵となった。



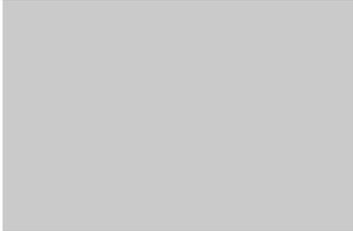
横尾忠則（日本原景旅行 霧島Ⅱ）1973年



久保晃（カメラマン）1958年



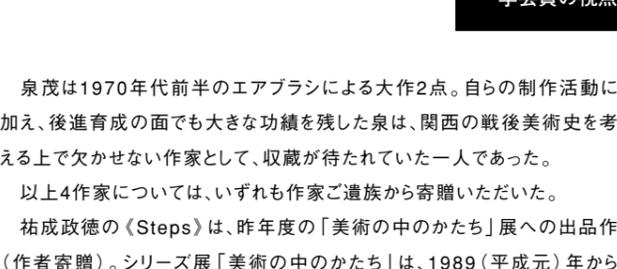
中村不折（裸女）1903－04年頃



小松益喜（元居留地風景）1939年



泉茂（MP20020）1974年



泉茂は1970年代前半のエアブラシによる大作2点。自らの制作活動に加え、後進育成の面でも大きな功績を残した泉は、関西の戦後美術史を考える上で欠かせない作家として、収蔵が待たれていた一人であった。

以上4作家については、いずれも作家ご遺族から寄贈いただいた。

（左から）木村光佑（RELATION（リレイション））1972年

祐成政徳の《Steps》は、昨年度の「美術の中のかたち」展への出品作（作者寄贈）。シリーズ展「美術の中のかたち」は、1989（平成元）年から続く、触覚による鑑賞を謳った展覧会で、《Steps》も手で触れ、また昇って鑑賞できる、いわゆる体験型の作品である。

（左から）横尾忠則（日本原景旅行 霧島Ⅱ）1973年

現代美術の作品数があまりに多いため、相対的に数は少なく見えるが、昨年度は近代美術の分野についても所蔵品を充実させることができた。中村不折（1866－1943）の、おそらく滞欧中の作と考えられる《裸女》（1903－04年頃）は、当館では層の薄い明治期のコレクションを補強するもの。本誌前号の表紙で紹介した新井完（1885－1961／1点、）、小松益喜（1904－2002／2点）、伊藤継郎（1907－1994／1点）、関口俊吾（1911－2002／2点）と、いずれも郷土の洋画家による作品群とあわせ、地元縁の深いご所蔵家より寄贈いただいた。本号巻頭で紹介している伊東深水（1898－1972）《松聲》は、1970～80年代に兵庫県知事をつとめた坂井時忠氏の夫人の旧蔵である。

（左から）横尾忠則（日本原景旅行 霧島Ⅱ）1973年

以上、昨年度の新収蔵品の一部は、「2013年度コレクション展Ⅱ 特集 新収蔵品紹介」（当館常設展示室、7月6日～11月10日）および神戸ピエンナーレ2013「横尾忠則 感応する風景」（当館ギャラリー、10月1日～12月1日）にて公開中である。

冒頭にも触れたとおり、昨年度も購入が困難な中、多くの理解あるご遺族、ご所蔵家のご厚意と関係者のご尽力により、当館コレクションを充実することが出来た。この場を借りて、あらためてお礼申し上げたい。

（えがみ・ゆか／当館学芸員）

# コレクションの展示について考える ——奇跡のクラーク・コレクション展

小野尚子

このたび「奇跡のクラーク・コレクション」展のために来日した73点のうち、その半数以上はルノワールをはじめとした印象派の作品が占めていた。そして、彼らの先達であったバルビゾン派・サン＝シメオン派や、同時代に活動したアカデミズムの作家の作品もまとまった数があり、また、作品の質もそれぞれの時代を代表するほどに高い。従って、これらを全体として眺めると、19世紀後半のフランス絵画史をたどることができたのである。この素晴らしい作品群をどのように魅せるかが、大きな課題の一つだった。

クラーク美術館の施設の増改築を機に始まったこの展覧会は、日本に来るまでにスペインやフランス、カナダなど各地を巡回している。マドリッドにあるプラド美術館では、ルノワールの作品が、ペラスケスやルーベンスらオールドマスターと並べて展示された。ルノワールがパリ国立美術学校で学ぶ傍ら、ルーヴル美術館に通ってはルーベンスの作品を熱心に模写していたことを考えると、いまや印象派の巨匠となって、このバロック期の巨匠と並べて展示されたことに粹な計らいを感じる。またフランスでは、ジヴェルニーにある印象派美術館で、当館で展示したラインナップとほぼ変わらない作品群が披露された。印象派の巨匠モネが睡蓮の咲く庭園をつくり、晩年の数々の代表作を生み出した土地で、モネの作品に加え、ピサロやシスレー、カイユボットの作品が展示されたことも象徴的だったように思う。

日本では、今年の2月から5月に、当館に先駆けて三菱一号館美術館で「奇跡のクラーク・コレクション」展が開催された。この会場では、作品を時系列に並べると同時に、クラーク夫妻の意図を随所に感じることができるよう取り

計らわれていた。例えばスターリング・クラークは、ルノワールの《皿のリンゴ》とシスレーの《籠のリンゴとブドウ》を、数ヶ月と間を空けず購入しており、この2つの作品が互いに補完し合うものとして、未来のクラーク美術館でまとめて展示する意図があったようだ<sup>1</sup>。三菱一号館美術館はこのエピソードを汲み取って、二つの作品を並べて展示した。また、印象派の作品も作家ごとではなく、果物や野菜を描いたものであったり、男性像であったりと主題でくっけてあった。これは、作品の描かれた時代や主題に関係なく、良いと思った組み合わせで展示することを好んだという、クラーク夫妻の折衷主義的な傾向を彷彿とさせる。コレクターのエピソードを読み解くようなこの展示方法は、ヨーロッパ風の邸宅といった趣で、比較的小さな部屋の続く建物の構造とよく調和していた。

一方で当館の展示スペースは、壁が高く巨大な長方形の部屋2つの間に、天井高がそれよりも少し低い部屋が収まる3つの空間でできている。一方、そもそも室内に飾ることを目的に購入されたクラーク・コレクションの作品群は比較的小さい。当初クラーク美術館のスタッフは、このような大きな空間ではクラーク・コレクションが映えるように展示するのは難しいのではと、危惧していたという。だが、例えば印象派の作品だが、これらはそもそも戸外で描かれた。どこまでも広がる空の下、ある時は野原で、ある時は海岸で移動式のイーゼルにキャンバスを構え、持ち運び可能になったチューブ入り絵の具を使って、画家たちは制作したのだ。それならば、当館のこの広々とした明るい空間を戸外のように見立てれば、それはまるで、印象派の画家たちが制作



印象派のセクション



アカデミズム絵画の並ぶ部屋



ルノワールの部屋

をした場の雰囲気再現できるのではないだろうか。そのように考えると、天井の低い中央の部屋は、伝統主義的なアカデミズムの作品を見るのに適している。彼らが、徹底して磨き上げた技量をじっくり観察するには、コンパクトな空間で作品をより身近に感じる方が都合が良さそうだ。印象派の作品との対比も体感できる。そうなれば、落ち着いた色合いのバルビゾン派の作品も同様に天井の低い部屋に配置し、印象派の先駆者としての彼らの作品を最初に見ると、その後の流れも掴みやすい。こうして、作品の見せ方、そして展示順は順調に決まっていた。当館では、19世紀後半のフランス絵画史をたどるように、作家はまとめて展示しつつ、かつ、作家や作品間の関係性も示すような展示方針となった。

このようにして出来上がっていった空間の中で、最終的に最も面白く感じたのは、「日常へのまなざし」というタイトルをつけた三番目のセクションだ。ここでは、マネとドガという2人の巨匠を中心にさまざまな作家の関係性が浮かび上がった。例えばマネとモリゾの作品は、ともに花瓶に活けた花を描いたもので、並べて展示した。二人は、師弟関係にこそなかったものの家族ぐるみで交際しており、モリゾはマネの弟ウージェヌと結婚。モリゾがマネから創作上の指南を受ける一方、マネはモリゾをモデルに何枚も絵を描いている。また、メアリー・カサットは画家になることを家族から反対され、故郷の美術学校の教育にも落胆したため、単身ヨーロッパを旅行して巨匠の作品を見てまわり、独学で自分のスタイルを築いていった。そんな中、パリでドガのバステル画に出会う。「それは私の人生を変えました。私は見たいと思う時、それを見たのです。」と、友人への手紙に熱っぽく綴るほど、衝撃を受けたようだ。その後カサットは、ドガの導きによって印象派展に参加して中心的なメンバーになっていくのだが、《闘牛士》は、そんなドガの絵に出会う2年前に描いた作品である。ドガの《稽古場の踊り子たち》と並ぶこの作品を見ると、この後カサットに訪れる大きな転機を思わずにいられない。また、バラの静物画に長けたカロリュス＝デュランは、ルノワールやマネ、モネを含む同時代の芸術家たちの集団肖像画《パティニョールのアトリエ》（1870年、オルセー美術館蔵）を描いた。

そして、展示室の構想段階からわくわくしたのはルノワールの部屋だった。クラーク美術館では全部で32点のルノワール作品が所蔵されており、今回はその大部分である22点が来日した。第一回印象派展が開催された1874年頃から1900年頃まで、印象派の最盛期とも重なる時代に描かれた作品が中心になっており、明るい色彩と自由闊達な筆の動きを駆使した幸福そう

な人物像たちは、まさにルノワール芸術の真髄を表すだろう。これらの作品の魅力を最大限に活かしつつ楽しんで見てもらえるためには、どうしたら良いだろうか。空間の区切り方で悩んでいた時、スタッフの中から名案が挙がった。思い切った広い空間をつくり、その中で、特に注目に値する作品をアクセントのように置いてみてはどうかということだった。想像してみると、それはもうルノワールサロンと呼ぶにふさわしい部屋である。展示してある順にただ作品をたどるだけではなく、作品に囲まれた空間そのものを味わったり、また行きつ戻りつしたりして作品を何度も見ることのできるような場所になるのではないだろうか。それは、まさに壮観!の一言。これ以上の案は無いように思い、即決だった。

こうして振り返ってみると、当館の特徴的な展示室も泰西名画の展示に適うようにと腐心して仕立てたわけだが、どうやらクラーク夫妻が美術館建設にあたって設けたルールに通じるところがあったようだ。というのも夫妻は、オールドマスターの作品は居住空間に近い大きさの部屋で、そしてルノワールも含む18～19世紀のフランス、イギリス、アメリカ絵画は大きなギャラリーで展示するようにという指示をしたという<sup>2</sup>。

ただ、今回はあらかじめ19世紀のフランス絵画に限定しての展示だった。そしてその内容は、我々外部の人間が個人のコレクションから必要な要素を抜き取り（もちろん、クラーク美術館の意向が大きく反映されている）、それを提示しやすい形で組み立てなおしたものである。それはクラーク夫妻の類まれなる審美眼とすばらしい収集力を示すに十分なラインナップだった。しかし、実はクラーク美術館のコレクションは、絵画に限ってもルネサンス期から20世紀初頭に至るまで幅広く、またこれ以外にも版画や素描、写真、銀器など実に多様である。クラーク夫妻のコレクションを本当の意味で知るためには、こうした他のジャンルにも触れなければならない。個人コレクションを紹介することの難しさと面白さに、肌で触れることができた展覧会だった。

（おの・なおこ／当館学芸員）

\*「奇跡のクラーク・コレクションルノワールとフランス絵画の傑作―」は、2013年6月8日から9月1日まで、当館企画展示室で開催された。

1 *Great French Paintings from the Clark: Barbizon through Impressionism*, Skira Rizzoli Publications, Inc. N.Y., 2011, p.196.  
2 Richard R.Brettell, “Refined Domesticity: Sterling Clark’s Aesthetic Legacy,” *Id.*, p.31.

# いのちの色 美術に息づく植物

鈴木慈子

## ショート・エッセイ

季節がめぐると、植物は再び芽吹き、花をつける。その生命力と彩りは、いつも新鮮な驚きに満ちている。

今回のコレクション展（2013年3月9日～6月23日）では、当館の所蔵品の中から「植物」をめぐる表現を選んで展示した。ひとくちに植物と言っても、作品1点1点を観察すれば、それぞれに特異な表現を見出すことができる。さまざまな作家の、植物をめぐる表現を比べてみることで、その豊かさを発見してほしいというのが企画の意図である。小磯良平と金山平三の静物画や、寄託作品を含め日本画を一堂に展示し、「植物」を1階2階あわせて7つの展示室を貫くテーマとした。鑑賞後、美術館から一步外に出ると、目の前の山々や並木、道端の雑草さえも、少し違って見えたのではないだろうか。

植物は、古今東西、美術作品に表されてきた。1階の4つの展示室について、順に述べたい。第1展示室では、植物と人間が共にある世界をテーマとした。たとえばジム・ダインの彫刻《植物が扇風機になる》（1973-74年）では、植物がしだいに扇風機に変身する。扇風機の台はハート形になっており、人間が暗示されている。アルミニウムという素材と作者の手のあとの組み合わせがおもしろい。また、小坂象堂、岡田三郎助、新井完が、着物の女性と植物を描いた作品を並べた（図1-3）。たった3点だが、洋画という技術をいかに自らのものにしようとしたかが見て取れる。明治以降、日本の画家たちは、手本とする西欧とくにフランスの絵画傾向と歩んできた（これは洋画に限らない）。着物女性に続く「木」を描いた作品群も、中山正實《南仏カーニュ風景》（1924-26年）や古家新《ヴァンス雪景》（1928-29年）といったフランスでの作、飯田操朗《風景》（1932年）のフォーヴィスム的な力強く太い描線、井上覚造《詩人（A）》（1951年）の現実を超越した不思議な世界、田淵安一《未完の季節》シリーズ2点（1978年）の抽象的な形態とまぶしい色彩など、じつに多様である。

第2展示室では版画を集め、木をモチーフにしたものも紹介した。小画



図1 小坂象堂《草摘み(摘草)》1897年頃



図2 岡田三郎助《萩》1908年



図3 新井完《あさがお》1928年

面特有の集中力（とりわけ銅版画）、木版画のおおらかさなどが感じられたのではないと思う。第3展示室の前半には、静物画を展示した。花や果物の色、それらが放つ生氣、テーブルや花瓶を配する空間構成などは、画家の技の見せどころである。安井曾太郎《桔梗図》（1945年、寄託作品）のバランス感覚、林重義《椿と三宝柑》（1942年頃）や鍋井克之《静物（絶筆）》（1968年）の鮮烈な色や画面をはみ出す躍動感、それぞれの作家の個性である。また、各展示室に配した池田治三郎の小品《バラ》は、正統的な洋画技術を身につけた画家の鍛錬の成果であり、開花したバラの生命力を生き生きと伝えている。

第3展示室後半は、明るく開放的な空間に、松井紫朗の彫刻《Flower Vase》と《Budding Bag》（いずれも1985年）を中心に大作を展示した。第4展示室では一転、照明を暗くして、エルンストの《博物誌》シリーズ（1926年）や榎忠《BLOOM》（2011年）にみられる「見立て」や、中山岩太や安井仲治の洗練された写真など、ひねりの効いたモノクロームの作品を集めた。河口龍夫の《関係一種子》（1986、87、89年）では、5枚の鉛の板に異なる植物の種が埋め込まれ、鉛の奥にいのちが宿る。鉛には放射能を遮る性質があり、いま見る者に東日本大震災と原発事故の記憶を呼び起こす。

震災に関していえば、第1展示室の最後を飾る福田美蘭の《淡路島北淡町のハクモクレン》（2004年）は、阪神・淡路大震災からの復興の願い、人々が1本の木に託した思いを描き出したもの。現在も新たな希望を生み出し続けている。

このようにふりかえてみると、植物の生命力、再生の力強さに加えて、美術作品の「いのち」を思わずにはいられない。先人たちが積み上げてきた当館のコレクションも、時代が移ろうにつれ、さらなる意味や文脈を得て、新鮮な驚きを提供しつづけるだろう。

（すずき・よしこ／当館学芸員）

## 「奇跡のクラーク・コレクション」展 関連事業

「奇跡のクラーク・コレクション」展では、夏休みを含めた約3ヶ月の会期中に、さまざまな関連事業を実施しました。

まずは、展覧会初日の6月8日に建築家の安藤忠雄氏による講演会です。現在建設が進んでいるクラーク美術館新館の設計を手掛けられた同氏に、新しい建物の紹介も交えながら「芸術の力」というタイトルでお話いただきました。この講演会は7月6日、8月4日、8月23日を加えた計4日間、全7回の開催となり、多くのお客さまにご来場いただきました。また、6月9日には、クラーク美術館副館長のトーマス・ローマン氏による「スターリング・クラークのルノワール：モダン・オールド・マスター」という講演会を実施。クラーク夫妻がどんな風にコレクションを形成していったのか、所蔵館スタッフならではの奥深いお話を聞くことができました。そして7月7日は、クラーク展のカタログ監修者である武蔵大学講師の吉川節子先生の講演会です。「印象派の魅力」と題して、モネやマネの作品を、時代背景や作家同士の関係性にも触れながら詳しく解説いただきました。

6月29日には、ヴォーカルユニットSAKURAの皆さんによる記念コンサートを開き、バりにちなんださまざまな名曲を美しい歌声で聞かせていただきました。8月24日にはおやご解説会を、また、学芸員による解説会は6月22日、7月13日、8月3日、8月17日の計4回、またミュージアム・ボランティアによる解説会を毎週日曜日に行いました。

（小野尚子／当館学芸員）



ローマン副館長による講演会の様子



モネについてお話しされる吉川先生

## 美術の中のかたち 「近いかたち、遠いかたち 一岡普司・重松あゆみ・中西學一」 関連事業

上記展の関連事業として7月27日（土）に重松あゆみアーティスト・トークを実施しました。芸大在学中の作品から最近作までの画像と、重松さんのかたちのヒントになる、様々なかたちのスナップショットを並行的に上映していただくことで、とにかく「作り続ける」重松さんの実態、というおかげで参加者に強く印象づけられました。また、かたちを眼でとらえて、その構造を土で追いかけることが重松さんの「思考」であることも。

学校の夏休みもあと数日を残すばかりとなった8月24日（土）の中西學ワークショップでは、小学中高学年の約30名が、中西さんの小宇宙に肉薄しました。水溶液上に作ったマーブル模様を和紙に転写し、次にそれらをちぎって再構成し、最後はスチレンボードとアクリル板でサンドイッチ。アクリル板



重松あゆみアーティスト・トーク



中西學ワークショップ

を通してみるマーブル模様の集積は、自分の手で作ったものなのに、遠い何かで、とても美しい…。

9月29日（日）は岡普司アーティスト・トーク&ワークショップ。鉄を溶断した岡さんの作品をフロタージュするというシンプルな作業です。まず、鉄板を並べる。重い。それをロール状のケント紙で覆ってしまうと見えない！同じことをやっているのに壁に貼って見ると、違う！プロセスごとに違った知覚が刺激された1日でした。

（西田桐子／当館学芸員）



岡普司アーティスト・トーク&ワークショップ

## 「2013県展」が開催されました

毎夏、恒例の県展。51回目となる「2013県展」は、絵画、彫刻・立体、工芸、書、デザイン、写真の6部門で募集。7月27日から8月17日、624点の応募の

## トピックス

中から選ばれた198作品を原田の森ギャラリーで展示しました。各部門の大賞から選ばれる「県展大賞」は絵画部門・藤井のぶおさん《来る日》が受賞。「対比の妙で見せる作品」と高く評価されました。

また、7月27日から8月4日までの期間、訪れた方々に気に入った作品を選んで投票していただきました。その結果、岡山英二さんの《ヒグラシ》（絵画部門）が最も票を集め、「県民賞」に決まりました。岡山さんは昨年県民賞に選ばれており、この賞の設置以来初めての連続受賞となりました。

今年の夏は記録的な猛暑となりましたが、入場無料になったこともあってか、昨年に比べお客様の数が300人ほど増えました。昨年、原田の森ギャラリーに隣接して横尾忠則現代美術館が開館したのも、その要因かもしれません。たくさんの方に展覧会を見ていただけたことをうれしく思います。

今回は、受付から開会までの日程が1週間と短く、搬入から、審査、展示を一気に行う、タイトなスケジュールとなりました。当館ミュージアム・ボランティアと博物館実習生のみなさんには、作品受付、審査の補助、会場の監視と返却にいたる、さまざまな場面で協力を得ました。本当にありがとうございました。

（鈴木慈子／当館学芸員）



「2013県展」会場風景

### ●——編集後記

●「奇跡のクラーク・コレクション展」は、おかげさまで18万人を超えるお客さまにご来場いただくことができました。猛暑の中、当館へ足をお運びくださったみなさま、本当にありがとうございました。本号では、同展をはじめ、同時期に重なったコレクション展（Ⅰ期、Ⅱ期）、また教育プログラムに関する記事をお届けいたします。

●秋以降、企画展示室では、「生誕130年 橋本関雪展」「昭和モダン 絵画と文学1926-1936」「フルーツ・オブ・パッション ポンピドゥー・センター・コレクション展」と、単独自主企画が続きます。今年度の「Art Ramble」では、以後も8頁体制で、これら特別展をはじめ、美術館の活動を幅広くお伝えしてゆく予定です。（江上）

兵庫県立美術館  
quarterly report  
ART RAMBLE  
VOL.40

2013年10月30日発行  
編集・発行：兵庫県立美術館  
〒651-0073  
神戸市中央区臨浜海岸通1-1-1  
印刷：株式会社岸本印刷所

# 夏休みだから特別なことを!

## 遊免寛子



当館でのダンスワークショップのようす(左:松本芽紅見氏)



飯川雄大さんによる映像のワークショップのようす

### 美術館の周縁

言うまでもなく「夏休み」は子どもたちの特権だ。当然、来館者数アップを目指す美術館において、「夏休み」は子どもたちを中心とした家族での来館を促す絶好の機会でもある。全国の美術館・博物館でも、近年の教育普及活動に対する評価の高まりを背景に、子ども・家族を対象とした企画が活発に行われている。

夏休みのワークショップの企画で特に知られるのは、倉敷にある大原美術館で開催されている「チルドレンズ・アート・ミュージアム」(通称:チルミュ)であろう。毎年8月末の土日、美術館全体を使って、鑑賞ツアーや制作、クイズ、ダンス、川柳など、子どもたちが美術や作品に能動的にふれあうきっかけとなる優れたプログラムを展開。「お祭り型」(筆者命名)を代表する名物企画である。その特徴としては、①展示室も会場(企画に合わせて展示構成を変更するなど館全体で支えている) ②多様な外部協力者と連携して運営している ③アーティスト指導のワークショップは少ない ④教育関係者や企画進行に関心がある大人向けの公開研究会等が挙げられる。美術館が行う子どものための究極の教育普及事業といえよう。

もちろん、神戸でも優れた夏休みのワークショップを行っている施設はたくさんある。当館が情報を取りまとめている兵庫県博物館協会所属の館だけでもこの夏休み中に21館64種類に亘るイベントが開催された。前号の小林学芸員の文章にもあったように、作品やアーティストに触れる場所が博物館以外にも多く存在する事を考えると、膨大な数の企画が日々実施されているのである。その中でも特に注目したいのが、神戸を拠点として社会とアートを繋ぐ活動を行うC.A.P.芸術と計画会議による「アート林間学校」と、神戸ファッション美術館で今夏行われた「夏のワークショップ」である。「アート林間学校」は、多くのアーティストがアトリエを構え、その企画・運営も自らが担う施設の特徴を活かし、毎年、約1週間、30近い講座を開講。指導者の殆どがアーティストであることから、内容は多様且つユニーク、大人も参加出来ること、事前申し込み・少人数制である点が特徴として挙げられる。人数を限定する活動は濃密で実りが多い。それをよく知るアーティストならではの視点であろう。一方、「夏のワークショップ」は、毎年10月下旬の土日に神戸市立小磯記念美術館(※以下、小磯美術館)が中心となって実施されている「RICアートカプセル(現在はRICエコアートカプセル)」のプレイベントを兼ねて開催された。RICエコアートカプセルは、小磯美術館が中心となり9年前から行われている事業で、現在は、近隣の神戸ファッション美術館、神戸ゆかりの美術館も加わり、六甲アイランド内外の各種関係機関の協力を得て実施されている。屋外の開かれた場所で、アーティスト・美術館スタッフ・島内の学校等がそれぞれ作品発表やワークショップを繰り広げる当事業は、人々が日常生活の延長線上で美術とふれあえる絶好の機会となっている。

「夏のワークショップ」はその連携を活かしたもので、チルミュと異なる点は、①毎週いずれかの事業を行う「分散型」(筆者命名) ②鑑賞は館内スタッフが担い、制作の講師は外部から招いたアーティストが中心 ③大人まで対象としているものが多い点である。RICエコアートカプセルを始めた小磯記念美術館では、図工専科の教員が指導主事として赴任していることもあり、長年に亘り高い志で教育普及活動が実践されてきた。そこに周辺の美術館も加わったことで活動が活性化。この夏休みには当館を含む神戸市内の博物館が連携した教員対象講座も開催した。

では、当館はどうであろうか。兵庫県立美術館では、前身の近代美術館時代より教育普及事業に力を入れており、子どものためのワークショップも継続的に実施している。ただ、夏休みに関しては、近代美術館時代に開催されていた子どものための展覧会は引き継がれていないし、「お祭り型」「分散型」いずれの事業も行ってこなかった。それには勿論理由がある。当館にとって夏の教育普及活動の中心は公募展「県展」と博物館実習なのだ。とはいえ、世のニーズは確実に高まっている。私自身、以前より夏休みの特別な事業の実現を希望していたこともあり、この夏、館全体のバックアップを礎に、美術館連絡協議会から助成金をいただき、8月24日(土)・25日(日)の2日間「夏休みスペシャル」を開催するに至った。開催にあたり重視したことは、美術館が作品とアーティストと子どもたちを繋ぐ場になりたいということである。特に、移転に伴い機会が減少している、関西を拠点として活動する若手から中堅のアーティストとの繋がりをもちたいと願い、中西學さん、河合晋平さん、松本芽紅見さん、飯川雄大さんにそれぞれ、立体造形やダンス、映像のワークショップを依頼した。特に、ダンスや映像は、「芸術の館」という愛称でさまざまな芸術を積極的に紹介してきた当館にふさわしいものであるが、基本的に教育普及担当職員が指導する当館のワークショップではこれまで開催する機会がほとんどなかった。今回、ダンスでは館内外のフリースペースの他、展示室でも作品を鑑賞して体で表現。映像では参加者がカメラを片手に美術館の敷地内を大移動。2種類の造形のワークショップや博物館実習生によるコレクション展の作品のワークシート、ミュージアムティーチャーの工作教室、特別展のおやこ解説会も含め、美術館が作品とアーティストと子どもたちと繋がった特別な2日間となった。

(ゆうめん・ひろこ/当館学芸員)